

Title	イサム・ノグチと谷口吉郎の精神性の継承と新たな創造(記憶としての建築空間 : イサム・ノグチ/谷口吉郎/慶應義塾)
Sub Title	New Creation and Spirit Succession of the Collaboration between TANIGUCHI and NOGUCHI(Architectural Space as Memory : Isamu NOGUCHI, Yoshiro TANIGUCHI, and Keio University)
Author	吉田, 和夫(YOSHIDA, Kazuo)
Publisher	
Publication year	2005
Jtitle	Booklet Vol.13, (2005.) ,p.76- 80
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000013-04211352

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イサム・ノグチと谷口吉郎の精神性の 継承と新たな創造

吉田 和夫

「萬來舎」は福澤諭吉が明治初期に「千客万来」の意味から広く人々が対話しあう施設として現在の塾監局の場所に創設したものに始まる。旧図書館と塾監局の間に位置に建てられていた「演説館」に隣接して建設され、教職員、塾員・塾生の団欒の場であった。建物そのものはその後幾度か改築され場所も移ったが、「萬來舎」という名称は戦災により1945年に取り壊されるまで引き継がれた。その後1952年、建築家谷口吉郎と彫刻家イサム・ノグチは、彼らが「新萬來舎」と称した第二研究室棟において、イサム・ノグチは「庭園」と「彫刻」を受け持ち、谷口は「建築」を担当し、特に「談話室の室内」には二人の作家的友情を心から融和させたコラボレーションにより萬來舎精神の再生を試みた。談話室は「野口ルーム」と呼ばれた。時代の新しいコミュニケーションを空間化しようとしていた建築家谷口吉郎と芸術ジャンルや文化圏を自由に横断するトランス・アートの視点をもった彫刻家イサム・ノグチとの出会いは、西洋と東洋の芸術が融合したモダニズム建築の歴史的結晶として記憶されてきた。そして2000年に第二研究室棟は萬來舎と名称変更された。

2002年1月、数々の検討委員会や法学部関係者の検討結果をふまえた上で、総定員600名規模の法曹養成と法学のアカデミズム両立を目指す法科大学院コンセプトが承認された。これを受け、2月に新大学院環境整備検討委員会は新校舎計画の検討を本格的に始めた。その結果、上記の規模とコンセプトを実現し、三田キャンパスの大学院研究教育環境の改善を図るには、三田地区に5000坪強の施設を整備することが望ましいという結論に至った。候補地として正門前土地、花市場跡地および東館の並び、西校舎地区について検討した結果、三田の丘の歴史的、景観的保存と建物規模を前提とすると、西校舎地区以外には適当な場所はないという結論に至った。この場所には、ノグチ・ルームを有する萬來舎が存在した。そのためノグチ・ルームの保存の仕方を含めて建築の設計提案競技を実施した結果、新校舎の3階の屋上庭園においてノグチ・ルームを保存する提案が採択され、

ここに萬來舎の移築問題とノグチ・ルームの保存問題が生じることとなつた。

萬來舎の精神の再現、歴史的建築物の保存、将来を視野に入れたキャンパス計画、賑わいの場の創出などから総合的に判断し、2003年春に以下の移築保存のコンセプトによって萬來舎の再生を試みることとした。

- ・重要文化財である演説館は物理的に保存する。
- ・ノグチ・ルームは新校舎3階に移築して物理的にできる限り復元し、イサム・ノグチと谷口吉郎のコラボレーションの作品の空間と精神性を継承する。
- ・谷口吉郎設計による建物については螺旋階段とその周りの建物ファサードを復元し、そのモチーフの空間と精神性を継承する。

これにより、以下のことが保存されると考えた。

(1) 精神性の保存

戦後の瓦礫が残る丘にイサム・ノグチがアクロポリスを発見した時とは、丘をとりまく環境、丘の意味も変ってきてている。現在の環境を分析すると同時に今後の発展を予想し、稻荷山周辺を含む丘の再発見を試みる。また現在、十分に活用されてない萬來舎を今一度、福澤諭吉の唱えた「千客万来」の場としての再生を試みる。新校舎計画においては、現実社会に即した複雑なケースに対応できる実学の精神は、塾内外のプロフェッショナルとの対話によって養われてゆくと考え、各所に対話を誘発するような知識・スキル向上の場とそれを支える仕組みを検討している。

慶應義塾がずっと継承し続け、イサム・ノグチと谷口吉郎によって再現化した萬來舎の精神を、更に未来へと継承してゆく必要があるものと考えている。

(2) 空間性の保存

彫刻《無》の円相の中に西方の落日が浮かび上がるというモチーフを重要視して、オリジナルの方位を正確に継承する。

増設された設備機械やテント庇などによりオリジナルの状態が現在損なわれている。復元の時代設定として、純粹なイサム・ノグチと谷口吉郎のデザインの状態にもどすため創建当時の姿に復帰することを心掛ける。また、談話と思索のための場としてのオリジナルな空間性の保存にも努める。

(3) 物語性の保存

重要文化財であり、キャンパス内の象徴的な位置に存在する演説館は現状位置に残し、萬來舎を新校舎へ移築保存するという選択肢をとらざるを得なかった。谷口吉郎とイサム・ノグチのコラボレーションの結晶となっている部分であるノグチ・ルームは勿論、そのアプローチに到るエントランス部分・螺旋階段などの周辺部分も保存することによって、二人のコラボレーションの物語性を残し発信していく。

ノグチ・ルームの保存問題は、上述のとおり芸術家イサム・ノグチと建

築家谷口吉郎とのコラボレーションでもあり、本質的に単純な問題でなく、その上保存そのものについても様々な考え方があることは明らかである。誠に残念ながら、施策は一つしかありえず、慶應義塾が決めた移築保存は、このコンセプトと異なる考え方の方々には受け入れられることはできないわけで、すべての人が納得できることにはならない。寄せられた様々な意見を要約して、ノグチ・ルームの芸術作品としての捉え方についての考察、そして萬來舎の移築問題を空間軸、時間軸、そして精神軸の3次元空間における考察を試みてみる。

一般に絵画や彫刻には設計図は存在しなく、芸術作品は唯一の作品であり、著作者以外が手を加えることはありえない対象である。萬來舎全体を芸術的作品とみなす場合、同じ考え方をとると、一度分解したものを復元することは芸術作品としてはできないこととなり、元の場所への復元も同じ問題に突き当たる。一方、設計図が存在する建物は鑑賞の対象だけではなく、建物には他の機能および用途があり、絵画や彫刻とは異なる作品であることは衆目の一致するところである。このことは法律的にも明らかに区別されている。解体は建物に関して基本的になされたが、ノグチ・ルームとそれに面する庭園および萬來舎の主要部全体を作品とみなす場合、建物の部分と作品が重なっている限り、その保存に関する考え方は単純ではない。現状保存を強く主張するグループは解体後も現状復元を強く希望した。一貫して、ノグチ・ルームを芸術作品とみなした米国イサム・ノグチ財団は、そのような考え方方に立ち、新校舎3階の屋上庭園に移築する限り、オリジナルの状態への復元には異論を唱え、単なる復元ではない、何らかのクリエイティビティによるものでなければならないと主張した。

慶應義塾は今回の新校舎への移築は、空間軸、時間軸、そして精神軸の3次元空間における総合的な考察においてベストな案であると考えているが、個々の軸においては必ずしもベストになっていない。同一性の観点から現状保存を強く主張する考え方とは、空間軸の物理的な保存ができれば、当然時間軸および精神軸においての保存が可能で、物理的な空間軸を優先する考え方である。そして、演説館との関係性からサイトスペシフィックな作品であり、現状の位置から少しでも離れた位置への移築はありえないという考え方である。しかしながら、ノグチ・ルームが環境芸術であるとするならば、空間軸においてその環境にも目を向けると、空間軸そのものの物理的環境が変化している限り、三田キャンパスにおいてサイトスペシフィックではあるが、さらなる局所的な空間性は果たしてどこまで意味をもつのか疑問である。

次に時間軸についてであるが、萬來舎そのものが戦後の荒廃した日本において西洋と東洋の芸術が融合したモダニズム建築として造られたという歴史性をもっている。そしてそのような時代から21世紀に入り、慶應義塾も教育および研究に関する新たな発展のためにキャンパスをリストラクチャリングする必要性が生じている。そのような長い時間軸の中で歴史性と

新しい時代への適応性の両方を維持する必要があり、時間軸においても未來の領域を十分見る必要性があると考えている。特に学生たちの教育の場としての環境の改善は重要で、そのような観点から今回の移築保存の措置がとられた。

最後に精神軸について述べる。保存のコンセプトにおいて芸術家イサム・ノグチと建築家谷口吉郎の二人のコラボレーションの物語性について触れた。二人それぞれの精神性についても積極的に保存する必要がある。そのような意味においては、解体してしまった限り、移築行為はやめるべきだという考え方を選択することはできない。人間は、空間と時間を越えて精神性を継承でき、精神性を継承するには二人の芸術家と建築家への想いを馳せるきっかけとなる空間あるいは時間がやはり必要である。確かに誰もが認めるように、空間軸、時間軸、精神軸は物理的には独立であるが、人間においては関係性を有することとなる。したがって、空間軸、時間軸、精神軸の3次元空間においてバランスのよい総合的なベストな解答が当初の新校舎への移築保存と考えた。

しかしながら、やはりできるだけ多くの人々の理解を得られるようなものにするための努力を怠ってはならない。そこで、米国イサム・ノグチ財団をはじめとする関係者の意見をこれまで伺ってきた。2003年11月、2004年5月に米国イサム・ノグチ財団シャピロ理事長の訪問を受け、そして7月には黒田理事が米国イサム・ノグチ財団を訪問し、最終的な財団の考え方をお聞きした。その結果は、新校舎3階屋上への移築に関しては了解するが、元の状態への復元には何らかのクリエイティビティが必要であるという内容であった。

専門家の意見を集約する形で行うこと目的として2004年7月に萬來舎移築検討会議を設けた。この会議には、設計者の大成建設と保存に関する指導を行う建造物保存技術協会の他に、建築家の隈研吾教授(理工学部)、仙田満教授(元建築学会会長、東京工業大学)、池田靖史助教授(環境情報学部特別招聘)、建築史の三宅理一教授(政策メディア研究科)、彫刻家の黒川弘毅教授(武蔵野美術大学)に加わっていただき、専門家の意見をお聞きして詳細設計を行うことにした。

米国イサム・ノグチ財団の考え方については萬來舎移築検討会議に報告された。萬來舎はイサム・ノグチと谷口吉郎とのコラボレーションであり、できるかぎり元の通りにして移築してはじめてこのコラボレーションが継承されるという意見もあったが、萬來舎移築検討会議は米国イサム・ノグチ財団の示唆を受け入れ、クリエイティビティを付加した設計を隈研吾氏に委ねることとなった。さらに世界的な景観設計家であるフランスのミシェル・デヴィーニュ氏に屋上庭園の設計を依頼することに決め、イサム・ノグチと谷口吉郎の精神性を継承しながら、隈研吾氏とミシェル・デヴィーニュ氏のコラボレーションによる新たな創造を行うことになった。

そして最終的には、萬來舎の1階天井を取り払い1階と2階を一体とす

る大空間の中にイサム・ノグチの作品と谷口吉郎の作品を配置して、メッシュを通して彼らの作品を眺めることによって空間に時間を挿入し、建築と記憶の境界を攪拌して、記憶を未来へ継承するという設計になった。また、庭園は、イサム・ノグチの自然を人工的に取り込む考え方を継承しながら、自然のフォルムを取り入れた新たな芸術性がデヴィーニュ氏により発揮され、草、木、石、小さな噴水のシンプルな構成の中に多様な見え方が創発するような設計になった。当初の移築による物理的な保存を軸とした慶應義塾の考え方も変更を迫られ、最終的には多くの関係者の意見を経てイサム・ノグチと谷口吉郎の精神性は少なくとも継承される移築になり、21世紀に新たな創造を生み出したものと確信している。学生、教職員をはじめとする多くの人々が、イサム・ノグチと谷口吉郎とのコラボレーションに思いを馳せ、彼らの芸術性に触れると共に、隈研吾氏とデヴィーニュ氏による新たなクリエイティビティの芸術性を享受されることを願ってやまない。

(よしだ かずお・慶應義塾常任理事、大学理工学部教授／制御工学)